

## ハンセン病療養施設の建築計画に関する研究 - 国立療養所星塚敬愛園の歴史的変遷 その1 -

ハンセン病 星塚敬愛園 療養所  
変遷 寮舎

正会員 ○藤本 啓輔\*\*  
同 友清 貴和\*  
同 楠木 雄一朗\*\*

### 1. 研究の背景・目的

1907年「癩予防ニ関スル件」の制定により、ハンセン病患者を強制隔離することが定められた。一度ハンセン病と診断された者は治癒しても療養所を出ることが許されなかったが、1996年「らい予防法」が廃止され、一般医療機関で治療されるようになり、患者は療養所を離れることを許された。

現在の日本において新患の発生数は年間10名を下回り、新たに入所する者もないことから、全国のハンセン病療養施設入所者は年々高齢化し、高齢者と障害者の長期療養施設と変化しつつある。今後、高齢化はますます進み、いずれこの施設は消滅することになるだろう。

本研究は日本におけるハンセン病政策のもと、施設がどのように変遷し、療養所における入所者の生活環境がどのようなものであったかということをも明らかにすることを目的としている。

### 2. 研究の方法

各時代における施設の配置図、平面図および文献や資料の収集を行い、ハンセン病療養施設の歴史的変遷、主に治療・療養施設以外の施設、および患者の生活環境の変遷について考察する。

### 3. 調査施設概要

調査の対象とした施設は、鹿児島県鹿屋市の国立療養所星塚敬愛園である。1935年に現在地に定められ、逐次今日まで、治療の充実など医療福祉向上への努力が続けられ、施設の拡張整備が進められてきた。

1954年、訓令定床1,530床をピークに新発生患者数の漸減、化学療法による軽快退所者、平均年齢の上昇(平成13年現在75歳)による高齢死亡などにより入所者数は年々減少してきた。しかし、らい予防法廃止法施行後も、後遺症や引き取り手となる子供が存在しないことから退所が可能となった例は少ない。現在、入所している人のほとんどは完全に治癒しており、「元ハンセン病患者の医療・福祉を行う場」としてその目的が変更された。

### 4. 入所者数の推移【図2】

1938～43年にかけてハンセン病患者の取り締まりが厳しくなり、開園当初300床であった訓令定床が、3度にわたる増床計画により、1940年には1125床となり、療養所への入所が増加した。

その後、戦時中の衛生状態悪化による死者や逃亡者により入所者数が減少するが、1947～49年になると逆に食料や治療を求めて転入所者数が増えている。

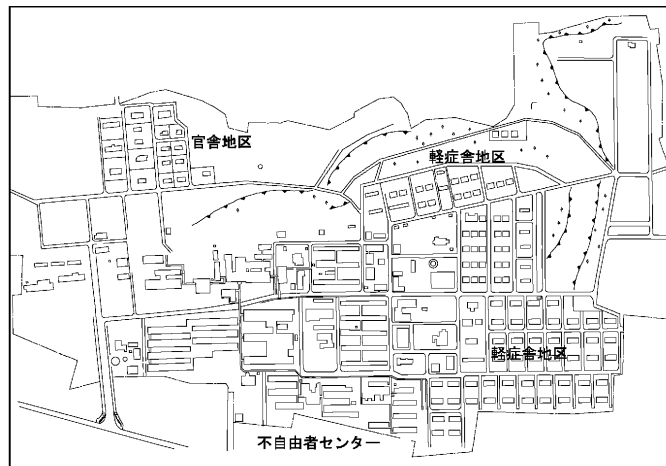


図1 配置図 2001年

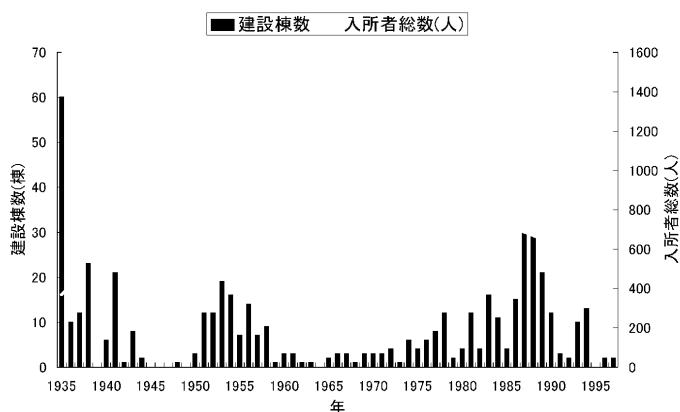


図2 入所者総数と施設の建設棟数

戦後の1950年から特効薬プロミンの使用と共に3年計画で増床され、入所者数も増加している。それ以降は入所者数は年々減少し、現在は478床となり新しく療養所に入所してくる者はいない。

### 5. 寮舎計画の変遷【図3】【図4】

一般居住地区の寮舎は軽症寮と不自由寮に分けられ、軽症寮は自立して生活できる者が、不自由寮には、生活に介助を必要とする者が住んだ。こうした寮の他に病棟がある。入所者は、年齢、性別、症状の軽重などにより、それぞれの寮に在籍することになっていた。

#### ■開園当初(1935～1949)

寮舎のほとんどは、男女別の軽症寮であり、独身寮であった。12.5帖が基準であり、1室に6～8人が雑居生活をしてきた。雑居部屋4室で1寮舎を形成しており、中央に12帖程の板の間があり、配膳や食事場として使用していた【図4-a】。

時代区分	開園当初 (1935~1949)	戦後の変革期 (1950~1964)	整備期 (1965~1979)	現在 (1980~)
軽症寮	a. 大部屋 (1室12.5帖)	1935		1980
	b. 1室個室 (1室4.5帖)		1950	1989
	c. 1室個室 (1室6帖)		1960	
	d. 2室個室 (1室6帖)			1986
不自由寮 センター	e. 大部屋 (1室12.5帖)	1938		1974
	f. 1室個室 (1室4.5帖)		1951	1988
	g. 1室個室 (1室6帖)			1968
	2室個室 (6帖+4.5帖)			1984

ここでいう大部屋、個室は以下のように定義する。  
 大部屋：玄関、トイレ、台所が共同で、各室を廊下でつながれた居室  
 個室：玄関、トイレ、台所が付属した居室

図3 各寮舎平面プランの変遷

不自由寮では軽症患者が重症患者の看護にあっていたため、東西の端に付添人室が付属していた。また、不自由者を考慮し、各大部屋ごとにトイレ、スロープが設けられていた【図4-e】。

■戦後の変革期、整備期（1950～1979）

雑居生活を強いられてきた患者たちの居住空間も次第に改善され、1950年代以降、寮舎の個室化がされていった。寮舎は長屋形式で、1室4.5帖の各居室に台所、トイレが付属した【図4-b】。また、戦後、園内の男女交際が自由になり、増床計画の主体は夫婦寮であり、1953年には全夫婦が各自の個室を持つことができた。1980年には大部屋はなくなり、完全に個室化された寮舎となる。

不自由寮においては、長屋形式の寮舎の1室が患者付添人室となっていた。そのため、看護人が個室間を行き来し、

いくつかの部屋を看ることができるよう、個室間にドアが設けられていた【図4-f】。

1968年には、患者看護制度から職員看護へと切り替えられたことをきっかけに、不自由者センターと呼ばれる、いわゆる老人ホーム・障害者施設のような施設が建設され、不自由者はそこに入居し生活介助を受けながら生活していた【図4-g】。

■現在（1980～）

軽症の入所者は現在、長屋形式の個室型寮舎に入居し、各自が個室を持っている【図4-c, d】。また、入所者の高齢化により、生活の中心は不自由者センターへと移行し、軽症寮は空室が見られる。

6. まとめ

本稿では調査施設の概要についてまとめ、施設では寮舎計画の変遷について見てきた。寮舎の平面プランにおいては開園当初は12.5帖の雑居生活だったものから個室型寮舎へ、4.5帖から6帖へ、そして1室から2室へと室面積の増加がみられ、生活の場としての機能の充実がみられた。今後は、入所者の高齢化に伴い、日常生活に介助を必要とする入所者が増加し、生活の場は不自由者センターが中心になると考えられる。

—参考文献—

- ・名もなき星たちよ～星塚敬愛園五十年史～ 星塚敬愛園入園者自治会 1985
- ・創立60周年記念誌 国立療養所星塚敬愛園 1995
- ・ハンセン病療養所における居住空間の変遷に関する研究 日本建築学会計画系論文集 No.546 2001
- ・ハンセン病療養所に関する実証的研究 蘭由岐子 1999
- ・片居からの解放 島比呂志 1996

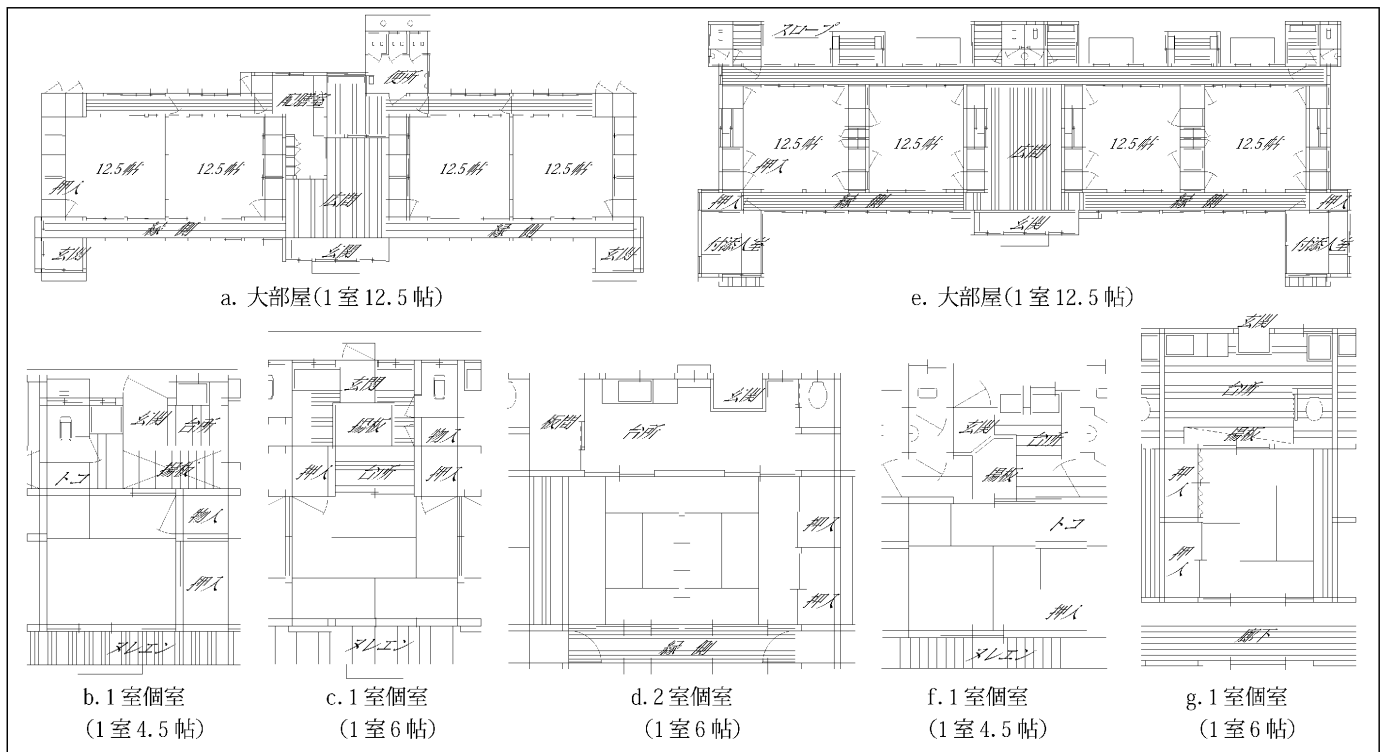


図4 主要寮舎の平面プラン

\* 鹿児島大学教授・工博

\*\* 鹿児島大学大学院

\* Prof.,Dept.of architecture, Faculty of Eng, Kagoshima Univ, Dr. Eng

\*\* Graduate school, Dept. of architecture, Faculty of Eng, Kagoshima Univ